随筆

アメリカ駐在記

山　崎　信　治

1．はじめに

私は2012年に入社し，KYB岐阜北工場品質保証部の研修１年間を含めて４年半，OEM向けショックアブソーバの設計に従事．その後，2017年４月から2019年１月までの１年10ヶ月間，KYB Americas Corporation（以下KAC）（写真１）での駐在生活を経験した．

駐在の話を頂く前には，ゆくゆくは海外でも仕事がしたいという気持ちはあった．しかし，まさかこんなにもすぐその機会が訪れるとは，文字通り“夢にも思っていなかった”．この件について上司より詳しい話を聞くと，設計としてではなく品質保証としての駐在を言い渡され，二重に驚いた記憶は今でも鮮明に覚えている．

私がKACの駐在員として，得られた経験の一部を紹介する．

写真１　KAC ロビーにて

2．アメリカの食事

アメリカでの代表的な食べ物は“肉”，その中でも“ステーキ”（写真２）は特に人気が高い．週末，夕食を食べにステーキハウスに入店しようとしても人が多く，１時間待ちというのも当たり前であった．アメリカのステーキは脂身が少ない赤身肉がメインのステーキが多く，食べごたえ満点であった．そして，ステーキに次いでインパクトがあるのが前菜とステーキの付け合せである．ステーキが焼き上がるのを待つまでの時間，前菜を注文してビールを楽しむのが一般的だが，前菜と付け合せの量が多いためステーキに辿り着くまでにお腹が満たされる．

写真２　ステーキとその付け合せ

3．インディアナ州について

KACの所在地はアメリカのインディアナ州である．インディアナ州はアメリカの中西部に位置し，州都はインディアナポリスである．車が好きでレースに興味がある方ならお馴染みのIndy500のレース会場がある場所である．

気候については，緯度が日本の青森県と同じ位に位置するので，冬場はとても寒くよく雪が降る地域である（写真３）．夏場は気温も上がり暑くなるが，カラッとした気候のため日陰に入れば日本ほど暑さを感じない．

インディアナ州における移動手段は，基本的に自動車がメインとなる．電車も走っているが荷物を運搬する貨物車がメインであった．冬場は積雪があるので，自動車の運転にはより一層気を付けなければならない．日本の降雪地域では冬場になるとスタッドレスタイヤに履き替える事が多いが，向こうでは冬場でもそのまま使用できるオールシーズンタイヤを一般的に使用している．その分タイヤ交換の手間はな

いため楽であるが，どちらにせよ注意を払わないと簡単にスリップして事故を誘発してしまう．通勤途中よくスリップによる交通事故を頻繁に目撃していて，他人事ではないと考え，いつも注意を払って運転していた．

写真３　冬場の自宅前風景

４．インディアナ州のイベント

アメリカでは多種多様なスポーツがある．インディアナ州においては特にバスケットボール及びアメリカンフットボールが大人気であった．両スポーツ共にインディアナ州に本拠地を置くメジャーチームがあるためである．バスケットボールは“PACERS”，アメリカンフットボールは“COLTS”の２チームが存在している．両チームともにファンが多く，インディアナでは数多くのグッズが売られていた．私自身も両チームの試合を観戦することができ，どちらの試合も会場が一体となって全力でチームを応援する風景がとても印象深かった．中でも，ハーフタイム中などに観客を盛り上げるための創意工夫はとても楽しめた．（写真４，５）

写真４　NBA PACERS戦
（Bankers Life Fieldhouse）

写真５　NFL COLTS戦
（Lucas Oil Stadium）

もう一つの大きなイベントで，インディアナ州の州都であるインディアナポリスで開催される“Indy500”という，世界三大レースにも数えられる世界有数のレースがあり，毎年５月の最終日曜日にIndianapolis Motor Speedway（写真６）にて開催されている．トラック一周2.5マイル（約４㎞）を200周，総走行距離500マイル（約800㎞）の耐久レースにて順位を争う．

会場には数多くの出店があった．Indy500に関するグッズや，ハンバーガー，ホットドッグ，ナチョス等々，日本の出店とは一風変わった品揃えが豊富にあった．

いざレースが開始すると盛り上がりは最高潮に達し，生で見るIndy500は格別で，臨場感，迫力，それに加えて観客の盛り上がりはテレビで観戦している時の比ではなかった．

写真６　Indy500
（Indianapolis Motor Speedway）

同所の一角には博物館があり，歴代の優勝車両（写真７）が展示されていて近くで観覧することが可能であった．Indy Carのみではなく，歴代のペースカーや当時使用されていたエンジンなども展示されていた．また，お土産コーナーには多くのIndy500グッズやプラモデルなども売られていた．

写真７　Indy500歴代優勝車両
（Indianapolis Motor Speedway Museum）

博物館へ行くとコースを周回してくれる専用のバスに乗車する事ができる．コース内を走って途中にあるコントロールタワー前で下車できる．それより10分程度の自由時間が与えられてコース内を散策できる．私はめったに機会がない，実際のIndy Carが走行したコース上に座ってコントロールタワーを背景に写真を撮ってもらった（写真８）．

写真８　コントロールタワー
（Indianapolis Motor Speedway）

５．アメリカでの業務

KACでは日本での設計開発業務経験を活かして，品質保証部のコーディネータという役割を担い，各製品の品質保証関連業務全般に携わっていた．それに加えて，現地スタッフに対する仕事の進め方や不具合対処の指導，日本との情報のやり取りを行なってきた．

私は2012年にKYBに入社して以来，品質保証部に研修という形で１年間従事したが設計業務をメインに携わってきた．それゆえに，品質保証的な考え方ができず，ローカルスタッフの疑問に答えるためにも，不具合の対処法等一から勉強をした．

初めに当たった壁は，言語であった．当然であるが英語で会話をしないと返事など返ってこない．仕事の依頼をしても，自分が想定している回答ではない返答が多々あった．ローカルスタッフとのコミュニケーションも上手く図ることができず，辛い日々が続いていた．私自身，人との会話は好きでそれが例え英語だとしても問題はないと考えていた．しかし，その考えが甘かったと早々に気付いた．仕事で使用する英語と日常で使用する英語の乖離が大きく，とても苦労した事が印象に残っている．

私はKAC品質保証部内において最年少で尚かつ経験値も少ないことで，他部署を含めたローカルスタッフから信頼を得るには難しい立場に置かれていることを痛感した．本社への提出資料や業務上わからない事を解決するには彼らの協力が不可欠であった．彼らと一緒に過ごす時間を積極的に増やすことを心掛け，回答ができない疑問を投げかけられた場合は，一緒に考えたり，時には一緒に作業したりした．その甲斐あって，徐々に彼らも私のために時間を費やしてくれるようになった．赴任当初に比べて相談されることや情報の展開等は格段に増え，より一層忙しくなったが，心細さや心配などは以前に比べて軽減した．ローカルスタッフとの時間を共有することでお互いが理解でき，少しずつではあったが私の仕事がやりやすい環境になっていった．

私の帰任が決定した際，多くのローカルスタッフが悲しんでくれたことはとても印象深かった．公私とも多くのことを教えていただき大変お世話になったKACメンバには心より感謝している．志半ばでの帰任だったため，何かしらで恩返しをしたかったというのが私の正直な気持ちである．

６．アメリカ以外での業務

駐在期間中に他国への出張も経験できた．アメリカに駐在できたおかげで英語を学ぶことができ，他

国の空港等で英語が使えるのでとても重宝している．

実際に出張へ出向いたのは，タイ，メキシコ，ブラジルであった．この中でも特に印象深かったのはブラジルだった．ブラジル出身の私は，いつかブラジルでも仕事がしたいという気持ちがあった．その望みがこういった形で実現するとは思っていなかったため，とても嬉しかった．念願のブラジル出張が叶ったのも，私が所有するパスポートがブラジルのものであったため，渡航用のビザは発行不要であった．それに加えて，ポルトガル語を話すことができるというのも大きな理由だったと考えている．

私は，ポルトガル語とスペイン語に互換性があるかどうかを聞かれることが度々あった．私の答えはいつも“互換性はあるが，試したことがないので確かではない”だった．しかし，今回スペイン語圏であるメキシコ出張がありそれを試す機会がついに訪れた．長年の疑問を検証できる日が来て，早速試した．結論から言うと，“互換性はある”．スペイン語主体の打ち合わせに参加した際，内容がおおよそ理解できた．但し，細かい内容やわからない単語もいくつか出てきたので完璧ではなかった．

さて，話をブラジルに戻すと，実に７年ぶりのブラジルをとても懐かしく感じていた．ちなみにここではポルトガル語のためストレスフリーで会話ができる．とはいえ，普段はあまり使わないので忘れている単語や表現が多々あり，苦労はあった．

ブラジル出張中の出来事で，ローカルスタッフの皆さんは私がポルトガル語を理解できるという認識がなかったため，私に関するコソコソ話をしていた．それに対して，工場長が走って皆の所へ行き“彼はポルトガル語が理解できるから”と注意を促していたのが印象深かった．しかし，その事もあって皆さんとは距離を近づけることもできた．やはり，現地の言葉を話せるというのは大きな強みとなる事が改めて実感できた．その後，無事に業務を終えて少しばかりの休暇を頂き，親戚一同が住んでいるサンパウロ州への訪問も叶った．

アメリカに戻った後も，ブラジルの人からの問い合わせが有り仕事が増える一方であったが，長年の望みだったこともあって喜んで協力させていただいた．

７．おわりに

KAC駐在期間中，苦労した点は多々あったが大変貴重な経験を数多くできた．私自身，設計の出身で品質保証という未だ経験したことのない業務に携わることができ，とても内容の濃い駐在期間であった．私が駐在員業務をやり遂げられたのは，共に仕事をした駐在員やローカルスタッフの皆様，業務でサポートしてくださった皆様のご協力があってのことと心より感謝している．この場をお借りして御礼申し上げたい．Thank you very much.

写真９　KAC品質保証部メンバ

著　者

山崎　信治

2012年入社．オートモーティブコンポーネンツ事業本部サスペンション事業部技術部．KAC駐在を経て現職．